

経済学史における進化的視点： アダム・スミスからシュンペーターまで

Evolutionary View in the History of Economics：
From Adam Smith to Joseph A. Schumpeter

八 木 紀一郎

YAGI Kiichiro

これまで私は、マルクス経済学やオーストリア派の経済学、そして歴史派の経済学などの研究をおこなってきたが、しばしばそれらの研究に統一があるのかどうかを尋ねられた。ようやく最近になって、進化的視点にたつて経済学史を見直すということで、それらを位置づける全体像が描けるのではないかという気持ちになってきた。私が「進化的視点」というのは、広くいえば経済を質的な変化をもたらす過程と見ることだが、この過程が多数の個体の相互作用が作り出す自生的なものであって、単一のプログラムにしたがう決定論的な過程ではないということも付け加えておかなければならないだろう。

この講演では、まず、経済学の創生期（18世紀）における進化的視点を、バーナード・マンデヴィルとアダム・スミスの分業論をとりあげて論じた。スミスは自然に与えられた人間の性向にもとづいた交換活動が分業を発展させると論じたが、人々が安んじて専門化するには、客観的に相互補完関係が形成されているということと同時に、それを表示する情報、および取引相手に対する信頼が形成されていることが必要になる。この信頼の形成と交換＝分業の発展の相互作用自体が進化的過程の重要な要素であり、『国富論』自体はそれを前提にしている。分業はその中に生産性増進の可能性を含み、また多様性を生み出す進化的な過程であるが、その発展の程度は市場の大きさに制約される。スミスの経済理論は、その貨幣と資本の概念が発展した分業を総括する経済学的範疇であることに留意するならば、その全体が進化的な理論であるといつてよいだろう。

次に、19世紀を代表する経済学者としてカール・マルクスをとりあげた。マルクスは、歴史過程における質的な変化を問題にし、彼自身自然界における変化を論じたダーウィンに親近感をいだいていたが、他方で決定論的な構図も保持していた。再生産論を例にとるならば、生産関係＝階級関係の再生産というマクロ的な側面とともに、個別資本あるいは個々の企業の世代交代＝再生産というミクロ的な側面があるはずである。前者と後者は分離しえないはずだが、前者から出発する場合には、多様性を無視した決定論的な理解になりがちである。私は、マルクスの理論体系が真に進化的といえるものになるには、ダーウィンの「特有の思考」（E・マイア）といわれるポピュレーション・シンキング（個体群思考）を取り入れる必要があると思う。再生産論をこのポピュレーションに応じた空間・時間的限定をもった過程として捉えること、また、差異をもつ個別資本がその再生産を可能にする資本群（企業群）のなかで相互作用（取引と競争）をおこなう経済機構（市場機構）の作用を解明することがその試金石になるのではないだろうか。

最後に20世紀経済学における進化的視角についてである。20世紀経済学における奇妙な事態は、個々の学者の思想や目標をとって見れば「進化的」ビジョンを抱いた経済学者は決して

少数ではなかったにもかかわらず、その「クラウディング・アウト」(エスベン・アンデルセン)が起きたということである。「進化」的なビジョンは、ドイツ歴史学派、アメリカ制度学派だけでなく、アルフレッド・マーシャルのような正統派の経済学にも及んでいたのに、20世紀中葉に成立した現代経済学(新古典派)においてはそれは忘れ去られた。前の世紀末にソースタイン・ヴェブレンは「なぜ経済学は進化的科学ではないのか?」と問いかけた。彼は、経済学者たちが「自然」とか「正常」という観念に捉えられ、それに対応した形式的な合理主義が「文明」として支配しているからだと論じた。「累積的過程」を進化の基本的性格と考えるヴェブレンにとっては、もとより「自然」も「正常」も存在しない。彼にとっては、現実から遊離する合理主義的科学という現象自体(経済学もその一環である)も、進化的な所産である「文明」の一部なのであった。

同じように、「進化的経済学」の困難さを身をもって認識したのは、シュンペーターである。彼には一般均衡理論の支持者としての側面と、企業者の革新活動を軸にして動的な発展理論を試みた野心的な理論家としての2つの側面があった。彼は、前者の側面において、ドイツ語圏だけでなく、米国でも日本でも大きな成功をおさめたが、後者については彼自身成功しているとは思っていなかった。もちろん、動的な革新過程についてのフォーマルな理論化ができなかったということもあるが、『経済発展の理論』などでの企業者の革新活動についての定式化が、その非日常性・非連続性を際立たせるものにとどまったことも不成功の理由であろう。

私は一昨年ハーバード大学を訪ねた際に、1933年の日付のある「社会進化と歴史過程」と題したシュンペーターの研究プランを発見した。そこでは、「社会進化」が「動的適応の多線の過程」として把握され、イノベーションの出現と普及を社会的視野のもとで「過程」として考察することや、また制度形成を「陰伏的な関係」の「陽表的様式」への転化として分析するといった現代の進化的経済学に通じる発想が示されている。1930年代のシュンペーターは、『景気循環論』のような歴史的・統計的総括に精力を傾注したので、このプランの方向での研究を進展させることはできなかった。

といっても、このプランに示されたような「進化」的ビジョンの理論化の方向が、1930年代においてすぐに前進することはありえなかったであろう。その点、生物学・生態学やシステム論・人口知能論の発展を参考にしうる現在では状況は少し変わってきている。しかし、ヴェブレンが指摘したような「合理主義」的文明の束縛は、現在でもなお続いている。経済学史・経済思想史の役割は、そうした束縛を断ち切ることに貢献するところにあるのかもしれない。

(京都大学経済学研究科教授)

2000年1月21日社会科学古典資料センター主催講演会(於 佐野書院)講演要旨